

石護摩壇

圀の内側のエリアは護摩の儀式に使われた。五大明王の一人である不動明王へさまざまな供物が奉納される。この護摩の儀式はインドで始まり、真言宗や天台宗などの密教や山岳修行の修験道信仰で実践されている。火は魔物や厄災を清め、危害から保護すると考えられている。聖火は丸い形をした石の中に収められており、その石は現在、中央近くにある苔むした小さな塚の下に置かれている。

四つ角に立てられた4本の石柱は、神聖な空間を示す縄を吊るすために使用されていた。ほとんどの護摩壇には、正面に向かって2本の背の高い柱があり、そこに祈禱者が座っており、その間に縄が吊り下げられている。この祭壇は非常に例外で、背の高い棒の代わりに神道鳥居がある。

圀のすぐ後ろにある大きな石の彫像は、密教の教主「大日如来」の化身として有名な不動明王像であり、護摩の儀式における崇拝の中心的な対象である。不動明王の画像は、通常、炎に包まれている。これは、不動明王の光背のギザギザの火炎で表されている。

この地域は、天台宗の寺院、輪王寺の一部である。日光の宗教的慣習は、少なくとも8世紀の勝道上人の時代から、神道、仏教、修験道の融合的な組み合わせで行われた。それでも、この種の護摩壇の神聖な空間に現れる神道の鳥居は非常に珍しいものである。